

新屈曲処置具を使用した大腸ESD：生体ブタ大腸における比較試験

岡本， 康治

<https://hdl.handle.net/2324/4110422>

出版情報：九州大学，2020，博士（医学），論文博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

(別紙様式2)

氏名	岡本 康治			
論文名	Colorectal endoscopic submucosal dissection using novel articulating devices: a comparative study in a live porcine model			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	中村 雅史
	副査	九州大学	教授	山浦 健
	副査	九州大学	教授	鴨打 正浩

論文審査の結果の要旨

【背景・目的】大腸における内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）は時間がかかり穿孔のリスクが高い。この研究の目的は、生体ブタ大腸における新屈曲処置具と従来のESD用処置具の安全性と有効性を比較することである。

【方法】生体ブタ10頭の3つの異なる部位（肛門から15cm、25cm、35cm）に対して、従来の方法（n=15）と屈曲処置具を使用した新手法（n=15）を用いて計30病変のESDを行った。施行時間、偶発症（穿孔、出血）、筋損傷を記録し、病変の単位面積あたりのESD施行時間を計算した。

【結果】従来法の穿孔率6.7% (1/15) に対し、新手法の穿孔率は0% (0/15) であった。筋損傷の数は、従来法より新手法で有意に少なかった (6 vs. 37; P=0.024)。平均施行時間は新手法で有意に短かった (4.6 ± 2.0 vs. 7.1 ± 4.1 min/cm²; P=0.042)。

【結論】新屈曲処置具を用いたESDは、偶発症を減らし、切除時間を短縮する。

これらの結果は、より安全かつ効率的なESD法の開発に資する結果と考えられた。

本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが適切な回答を得た。なお、本論文は共著者多数であるが、予備調査の結果、本人が主導的役割を果たしていることを確認した。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。